

平成 21 年 6 月 16 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18720218

研究課題名(和文) 日本列島北部における古代物流経済圏の成立に関する基礎研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Establishment of the Ancient Distribution and Economic Zone in the Northern Part of the Japanese Islands

研究代表者

鈴木琢也(SUZUKI TAKUYA)

北海道開拓記念館・学芸部・研究員

研究者番号：40342729

研究成果の概要：

本研究では、第一に、擦文文化の地域(北海道)から出土する交易品である鉄製品を中心に本州文化の遺物の集成を行い、その分布や特性を明らかにした。第二に、それら遺物の生産地および供給地、流通経路の時空的な展開を明確にした。第三に、文献史料から交流や交易を示す記述を集成し、同時期の北海道から本州への交易品と考えられる毛皮類、海産物類などの具体的な内容を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	360,000	3,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：擦文文化、古代、鉄製品、須恵器、物流交易、北海道、東北地方

1. 研究開始当初の背景

古代の北海道と本州の交易や物流についての研究は、北方文化、あるいは北方史研究のなかで考古学と文献史学が学際的に研究を進める課題として非常に注目されてきた。しかしながら、この物流経済の実像については、未解明な部分が多いのが現状であった。

このような研究の現状をふまえ、平成15～17年度に文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)「擦文文化にみる本州物流経済の考古学的基礎研究(課題番号 15720187)」を受け、擦文文化の地域(北海道)から出土した本州文化の須恵器を集成し、その特性か

ら生産地および供給地、さらには流通経路や交易拠点について検討した。その結果、擦文文化の地域にみられる須恵器は、青森県の五所川原窯跡群で生産されたものが多く、10世紀ころを大きな画期として、北海道全域の河川河口域や下流域、さらには河川中流域に拡散することを明らかにした。さらに、その背景に擦文文化と本州文化の物流経済が成立したことを示唆し、10世紀ころには、本州の物流経済の枠組みの中に擦文文化の集団が取り込まれていったことを指摘した。

これらは、古代の北海道と本州の物流経済の社会的な構造の復元を試みること、さ

らには日本列島北部地域における古代物流経済圏の成立過程を明らかにすることを大きな目的に進めてきた研究の一つであった。

この研究を進めるなかで、古代の北海道と本州の物流経済の社会的な構造を、より具体的に明らかにするため、考古学的な視点から次の研究課題が提起された。第一に、古代における本州から北海道への代表的な交易品である鉄製品を中心に本州文化の遺物の集成を行い、その分布や特性を明らかにすること。第二に、その生産地、交易拠点の展開、流通経路を須恵器の物流との比較検討などから明らかにすること。第三に、同時期の北海道から本州への交易品と考えられる毛皮類、海産物類などの具体的な内容を把握すること。第四に、古代東北地方における鉄製品・塩・米・須恵器生産の本格化と古代北海道における物流経済の発展との関わりを明らかにすることであった。

したがって、これらの課題を明らかにし、古代の北海道と本州の物流経済の実像を解明するため本研究を実施するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次に示すとおりである。

(1) 擦文文化の地域(北海道)から出土する交易品である鉄製品を中心に本州文化の遺物の集成を行い、その分布や特性を明らかにする。

(2) 鉄製品を中心とする本州文化の遺物の生産地および供給地、流通経路、交易拠点の時空的な展開について解明する。

(3) 文献史料から交流や交易を示す記述を集成し、考古資料と比較検討することで、古代の北海道から本州への具体的な交易品を把握する。

以上から古代の北海道と本州の物流経済の社会的な構造の復元を試み、さらには日本列島北部地域における古代物流経済圏の成立について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、次の方法により実施した。

(1) 擦文文化の地域(北海道)から出土する交易品である鉄製品を中心に本州文化の遺物の集成を行い、その具体的な分布や特性を明らかにするため、①北海道の博物館や埋蔵文化財センターなどで本州産鉄製品(刀子、斧、鎌、鋤・鍬など生活用具類、刀剣・武具類)を実見し、形態等の特性の調査を行った。②同様の施設で鉄製品と関連する須恵器や装飾品など本州から流入した遺物の特性の調

査を行った。③鉄製品が出土した海岸部、河川流域の交易拠点となる遺跡の立地環境の調査を行った。④北海道に流入した古代の鉄製品、その他の関連する交易品(遺物)の分布や特性のデータを集成し、時空的な整理・検討を行った。

(2) 鉄製品を中心とする本州文化の遺物の生産地および供給地、流通経路、交易拠点の時空的な展開について解明するため、①東北地方の博物館や埋蔵文化財センターなどにおいて東北地方で生産されたと考えられる鉄製品の調査を行った。②同様の施設で鉄製品と関連する須恵器や土師器などの特性の調査を行った。③東北地方における鉄製品などの生産遺跡および交易関連遺跡の立地環境の調査を行った。④東北地方北部で生産された古代の鉄製品や須恵器、土師器の特性についてのデータを集成した。

(3) 古代の北海道から本州への具体的な交易品を把握するため、古記録や貴族の日記、有職故実書などから、北海道産の交易品に関連する記述を集成した。

4. 研究成果

本研究の成果は、次に示すとおりである。

(1) 擦文文化の地域(北海道)から出土する交易品である鉄製品を中心に本州文化の遺物の集成を行い、その具体的な分布や特性を調査した結果、次のことが明らかになった。

①鉄製品の時空分布とその特性

北海道における8~9世紀の鉄製品の分布は、日本海沿岸の北海道西部、石狩低地帯の河口域や下流域に集中し、種類も刀子、斧、鋤・鍬、鎌、釘、紡錘車など実用的な生活用具類のほか、武具類などが流入している(図)。また、この時期には本州産蔵手刀の分布が石狩低地帯の擦文文化の遺跡と、オホーツク海沿岸域の枝幸町目梨泊遺跡、網走市モヨロ貝塚などオホーツク文化の遺跡にみられる。

10~12世紀になると、分布は北海道のオホーツク海沿岸の河口域一帯や、太平洋沿岸の北海道南部・東部を含む北海道全域の河口域や下流域、石狩川水系中流域(盆地)に拡がり、その種類も、前代からの品に加えて新たに錐や針などの生活用具類、鉄製釣針や鈎状鉄製品などの鉄製漁労具類がみられ多様化する(図)。この鉄製釣針や鈎状鉄製品の流入から、骨角製釣針・鈎が本格的に鉄製品に置き換わったことが指摘できる。

このことは、10~12世紀に鉄製品の物流・交易が活発化したことを示すものである。さ

らに、11世紀以降には、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域・下流域に鉄製品の分布がみられ、「日本海ルート」に加え、「太平洋ルート」による交易ルートが成立したことを指摘できる。

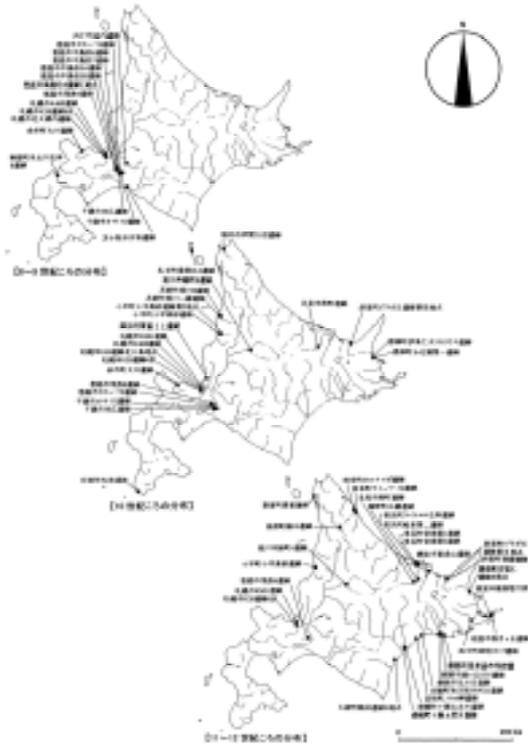


図 鉄製品の時空分布

②須恵器の時空分布とその特性

北海道(擦文文化期)から出土する須恵器は、これまでに約220ヶ所の遺跡で確認され、青森県五所川原産須恵器と、それよりも古い特性をもつ須恵器が出土している。この五所川原産須恵器の生産年代は10世紀である。また、それより古い須恵器の年代は8~9世紀であり、秋田県秋田市および男鹿半島・八郎潟周辺の窯跡で生産されたと考えられるものがみられる。

8~9世紀の須恵器の分布は、日本海沿岸の北海道西部、石狩低地帯の河口域や下流域に集中する。竪穴住居址床面から出土した須恵器の器種別出土数の割合をみると、坏68%、蓋10%、長頸壺3%、中甕19%で、坏の出土数が半数以上を占めている。

五所川原産須恵器の流入する10世紀になると、分布域は前代からの地域に加えて、北海道北西部やオホーツク海沿岸、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域・下流域、さらに北海道中央部の石狩川水系中流域(盆地)など、北海道全域に拡がる。また器種別割合をみると、坏13%、蓋0%、長頸壺50%、中甕37%と大きく変化し坏が大幅に減少する一

方、長頸壺と中甕が大部分を占める。

以上のことから、須恵器の場合も、10世紀を画期として、日本海沿岸域の北海道西部、および石狩低地帯の河口域や下流域から、北海道全域の河口域や下流域、さらに石狩川水系中流域まで拡散することがわかる。鉄製品と同様、10世紀を画期とする物流・交易の活発化を指摘できる。

しかしながら、北海道における須恵器の出土状況をみると、竪穴住居址に伴って出土する例が少なく、一遺跡あたり数点の破片しかみられない。しかも、器種は中甕と長頸壺にほぼ限定されていく。したがって、特に10世紀を中心とする時期には、主要な交易品ではなく、鉄製品にともない、酒類などを入れた容器として北海道に流入したものとみるのが適切であると考えられる。

③銅鏡の時空分布とその特性

北海道から出土する本州産の銅鏡は、厚真町上幌内モイ遺跡、平取町カンカン2遺跡、同亜別遺跡、釧路市材木町5遺跡など太平洋沿岸の北海道南部~東部の河川河口域を中心に分布し、石狩低地帯の恵庭市カリンバ2遺跡からも出土している。これらの銅鏡は、擦文土器との供伴関係などから10~12世紀の年代が考えられる。また、北海道の日本海沿岸域では、銅鏡の分布がみられない。

このことは、10~12世紀に「太平洋ルート」による物流・交易が活発化したことを示すものと考えられる。

(2)鉄製品を中心とする本州文化の遺物の生産地および供給地、流通経路、交易拠点の時空的な展開について検討した結果、次のことが明らかになった。

①8世紀後半~9世紀

この時期は、先に示した鉄製品や須恵器の分布が石狩低地帯を中心に集中する一方、本州との中間に位置する北海道南西部(渡島半島)での出土が希薄なことから、海路、直接的に石狩川水系の河口域・下流域に交易品が搬入されたことが想定される。その場合、北海道で出土する須恵器が秋田県域の窯で生産されたと考えられることから、主として石狩低地帯と秋田県域(出羽国)を主体とする地域間の物流・交易が展開していたことが想定される。また、この時期は、蕨手刀の分布などから石狩低地帯の擦文文化集団が、本州とオホーツク文化集団の交易に関わっていたと考えられる。

②10～12 世紀

9 世紀末には、北海道のオホーツク文化が終焉を迎え、この文化にかわり 10 世紀以降、擦文文化が石狩低地帯から、新たに日本海沿岸域の北海道北西部～オホーツク海沿岸域、太平洋沿岸域の北海道南部・東部にまで拡大する。これらの遺跡からは本州産の鉄製品や須恵器、銅鏡などが確認される。さらに、北海道出土の須恵器が青森県五所川原産須恵器にかわり、この時期、青森県の岩木川水系下流域・日本海沿岸の河口域と、外浜・陸奥湾周辺地域を中心に擦文土器の分布が確認される。

したがって、北海道の日本海沿岸～オホーツク海沿岸、石狩低地帯の河口域と、青森県岩木川水系下流域・日本海沿岸の河口域を主体とする地域の間で「日本海ルート」による交流・交易が展開していたと考えられる。また、北海道太平洋沿岸の河口域と、青森県外浜・陸奥湾周辺地域との間で「太平洋ルート」による交流・交易が展開していたことがうかがわれる。

(3) 文献史料から交流や交易を示す記述を集成し、考古資料と比較検討することで、古代の北海道から本州への具体的な交易品を検討した結果、次のことが明らかになった。

①8～9 世紀

8～9 世紀において本州への交易品と考えられるものは、羆皮・葦鹿皮・独犴皮・索昆布・細昆布である。『続日本紀』靈龜元年九月一日条によると、六位以下の官人が鞍や横刀の飾りに羆皮を用いることが禁止されている。また、『延喜式』(巻四十一弾正台)によると、羆皮は障泥として使用され、五位以上の官人が使用するものとして位置づけられている。また葦鹿皮・独犴皮・索昆布・細昆布は、『延喜式』(民部下・交易雑物条)に陸奥・出羽両国の「交易雑物」として記載され、北海道産の交易品であった可能性が強い。さらに『類聚三代格』(巻十九・禁制事)所収の延暦二一年六月二四日太政官符では、王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮を交易することが禁止されている。

以上から、10 世紀以前において、毛皮類が北海道の主要な交易品であり、王臣家による私的取引の対象にもなっていたことがうかがわれる。

②10～12 世紀

10～12 世紀には、9 世紀の五品から羆皮・独犴皮・索昆布・細昆布の四品が消えて、水豹

皮・鷲羽・肅慎羽・鷲尾・奥州貂裘が加わる。水豹皮は、『新儀式』(巻四・野行幸事)によると、野行幸に従う鷹飼の腹巻に指定され、『師遠年中行事』(正月条)によると、六位以上の官人が帯びる剣の鞘に指定されている。水豹は北海道東部やオホーツク海沿岸域に生息するアザラシで、その斑紋から名が付いたものであろう。鷲羽・肅慎羽は、『御禊行幸服飾部類』によると、堀川・鳥羽・後鳥羽天皇の大嘗会禊行幸の際に貴族の隨身がおびる胡籙に用いられている。鷲羽・肅慎羽は、北海道の主要交易品で、北海道北部や東部に飛来するオオワシやオジロワシの尾羽から採取したものであったと考えられる。特に肅慎羽とはサハリン、あるいは北海道に飛来するオオワシの羽をさす可能性もある。「奥州貂裘」も北海道・サハリン産のクロテンの毛皮が奥州の交易品として都にもたらされたものと推測される。

これらの交易品(毛皮類や鷲羽など)は、先の有職故実書などの記述から官位などによりその使用が定められており、貴族社会での身分標識となっていたことがわかる。

さらに、この時期は、これらの交易品が陸奥・出羽守や鎮守府將軍などから有力貴族への献上品となっている。たとえば、『御堂関白記』(長和元年閏十月廿一日条)や『小右記』(長和三年二月七日条)には、鎮守府將軍藤原兼光・平維良から藤原道長への献上品として鷲羽がみえるなど、10 世紀以降、東北地方に派遣された陸奥・出羽守や鎮守府將軍などの軍事貴族がこれらの交易品を「都」の有力貴族への献上品としていた。

また、『奥州後三年記』上には、陸奥守である源義家(軍事貴族)を清原真衡が饗応し、あざらし(毛皮)を献上した記録もみられる。この時期には、鎮守府・秋田城の在庁官人であり、在地の有力勢力である安倍氏・清原氏が軍事貴族とともに北方取引に関わっていたことがうかがわれる。

以上、この研究では、古代における北海道(擦文文化)と本州の物流・取引は、10 世紀ころを画期に活発化し、10～12 世紀にかけて隆盛をむかえることを明らかにした。さらに、この古代物流・取引隆盛の背景には、本州向けの交易品(毛皮類、鷲羽など)の獲得を目的とする擦文文化集団の北海道全域への拡散・定住があり、この擦文文化集団から毛皮類や鷲羽などが交易品として本州にもたらされたことを明確化した。

この研究を進める中、擦文文化が拡散した

結果として、地域的なまとまりをもつ拠点的な交易圏が北海道の七つの地域に成立していたことを確認した。しかも、これらの交易圏と東北地方の五つの地域が積極的に物流・交易を活発化させた状況がうかがわれた。

すなわち、この擦文文化の七つの地域の拠点的な交易圏と東北地方の五つの地域を結ぶ交易ルートを明確にすることが新たな課題として提起されてきた。さらに近年、津軽海峡周辺地域に古代国家に関連する遺物(律令祭祀具、仏教関連遺物、檜扇など)や遺跡が検出され、北海道から東北地方を経由し古代国家へとつながる交易ルートの解明が可能となってきた。

したがって、今後の研究の展望として、北海道と東北地方、古代国家へとつながる海上交通・内陸交通、さらには交易システム、物流経済の構造を明らかにしたいと考える。

本研究の成果は、日本列島および北東アジア地域における交易や物流経済の研究を進展させるものであり、日本列島から北東アジア地域(サハリン、千島を含む)へとつながる物流経済の流れを明らかにする研究として位置づけられるものである。さらに、後の中・近世アイヌ文化における北方交易の研究に新たな視点をあたえるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

1. 鈴木琢也, 右代啓視, 村上孝一; 2009 年, 根室市別当賀川口 1 号チャシ・別当賀川口 6 堅穴群の地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告, 第 48 号, p23-38. (査読有)
2. 鈴木琢也; 2008 年, 擦文文化と古代北方交易の展開. 第 36 回全国古代史サマーセミナー発表レジュメ集, p77-88. (査読無)
3. 鈴木琢也, 右代啓視, 村上孝一; 2008 年, 浦臼町晩生内 1 号チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告, 第 47 号, p15-28. (査読有)
4. 右代啓視, 鈴木琢也, 山田悟郎(ほか 5 名); 2007 年, 稚内市サンナイ遺跡の地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告, 第 47 号, p39-58. (査読有)
5. 鈴木琢也; 2007 年, 北日本における交流の諸様相. 奥州市世界遺産シンポジウム報告集, 奥州市教育委員会. p53-60. (査読無)
6. 鈴木琢也, 右代啓視, 村上孝一; 2007 年, 浦臼町晩生内 2 号チャシの地形測量調査報告.

北海道開拓記念館調査報告, 第 46 号, p17-28. (査読有)

7. 右代啓視, 鈴木琢也, 山田悟郎(ほか 2 名); 2007 年, 礼文町沼の沢チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告, 第 46 号, p69-82. (査読有)

8. 鈴木琢也; 2006 年, 北日本における古代末期の北方交易-北方交易からみた平泉前史-. 歴史評論, NO. 678, 校倉書房. p60-69. (査読有)

9. 鈴木琢也; 2006 年, 擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流. 北方島文化研究, 4 号, 北海道出版企画センター. p19-42. (査読有)

10. 鈴木琢也; 2006 年, 古代北海道における物流経済, アイヌ文化と北海道の中世社会, 北海道出版企画センター, p19-31. (査読無)

[学会発表] (計 4 件)

1. 鈴木琢也; 擦文文化期の物流. 北海道考古学会研究大会, 2009 年 5 月 9 日, 北海道札幌市

2. 鈴木琢也; 擦文文化と古代北方交易の展開. 第 36 回全国古代史サマーセミナー, 2008 年 8 月 28 日, 広島県廿日市市

3. 鈴木琢也; 北日本における交流の諸様相. 奥州市世界遺産シンポジウム, 2007 年 3 月 25 日, 岩手県奥州市

4. 鈴木琢也; 北日本における古代北方交易の展開. 北方島文化研究会第 20 回研究会, 2006 年 6 月 24 日, 北海道札幌市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 琢也(SUZUKI TAKUYA)
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号: 40342729

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者